

化學に關係ある萬國會議など並にそれ等と

我が國との關係に就て

帝國學士院會員 大 幸 勇 吉

化學に關係ある萬國會議などに就てお話することに致しましたが、それには我が帝國學士院が深く關係する所がありまして、そして我が帝國學士院のことは一般にあまりよく知られてゐないやうでありますから、先づ我が帝國學士院の成立ちから今日に至るまでの概況をお話することに致しました。

明治十一年(1878)の十二月に文部卿西郷従道が當時文部省の雇顧問であつた米人マレーの建議に由り學士會院の必要を認めて西周・加藤弘之・神田孝平・津田真道・中村正直・福澤諭吉及び箕作秋坪の七名の學者に諮詢し、その協賛を得て東京學士會院が創立されることになつたのであります。この西郷文部卿から上記七名の學者への連名(いろは順)の手紙に各が氏名の下へ朱で書判を書かれたものが尙帝國學士院に類にして保存してあります。

明治十二年(1879)一月に文部大輔田中不二麿(文部卿缺員)が前記七名の學者を東京學士會院の會員に推舉されまして、茲に東京學士會院が成立したのであります。本會院は教育の事を討議し學術技藝を評論するを目的とし會員は四十名を限り會院に於て選舉し文部卿の認可を得るといふ制度でありました。最初の會長は福澤諭吉で、それから西・加藤・西・加藤・細川・加藤と順次會長を勤められて明治三十九年に本會院が帝國學士院と改まるまでに至つたものであります。

明治十八年(1885)に文部卿大木喬任は改めて東京學士院組織の大綱を示されましたが、その要旨は學藝の品位を高くし以て教化の裨補を圖るに在りとし、會員は帝室の御選に係る者十五名會員の推選に係る者二十五名から成ることになりました。

明治三十九年(1906)六月帝國學士院規程が發布されまして東京學士會院は帝國學士院と改まつたのであります。規程はその後多少變更されましたが、現在の規程規則などの要點を申し上げますと次のやうであります。

帝國學士院の目的は學術の發達を圖り教化を裨補

するのであります、會員は帝國學士院に於て碩學の中から推選し勅旨を以て任命されるのであります。

學士院は第一部と第二部とから成り、各部會員を五十名と限つてありまして、第一部は文學及び社會的諸學科に屬する者から成り、第二部は理學及びその應用の諸學科に屬する者から成るのであります。役員は任期が三年で、院長及び幹事は總會で選舉するのであります。第一部長及び第二部長はそれぞれの部會に於て選舉するのであります。帝國學士院と改つてからの院長は加藤弘之・菊池大麓・穂積陳重・岡野敬次郎の諸男爵でありまして、そして現在の役員は院長理學博士櫻井錠二、幹事法學博士加藤正治、第一部長法學博士小野塚喜平次及び第二部長醫學博士佐藤三吉の諸氏であります。

帝國學士院は毎月(八月及び九月を除き)十二日に通常總會及び部會を開くことになつてをり、午後三時から總會に於て會員及びその紹介に由る研究の報告があり、五時から各部會を開いて事務上の事項を議し、兩部會の終了を待つて再び總會を開き、各部長から部會に於ける決議事項を報告し、又學士院全體に關係の事務を協議するのであります。總會に於ける研究報告は總會記事と共にその月内に帝國學士院紀事(歐文)に於て發表されるのであります。

帝國學士院に於ては特別委員を設けて學術上の調査も致してをります。

毎年一回よく審議の上皇室からの御下賜金並に篤志家の寄附に由り學術獎勵のため授賞を致し、また會員並に會員外の希望者に對し審議の上學術研究費の補助を致し或は又學術研究の獎勵を目的とする事業に對し授賞すべき候補者或は研究費補助候補者の推薦を致してをります。

貴族院令によりまして第一部及び第二部から互選によつて二名宛の議員を貴族院へ送つてをります。

帝國學士院に就てのお話はこれに致しまして、これから學術研究會議の成立ちからその組織の概要をお話することに致します。

1918年(大正七年)の初め世界大戦がなほ盛んなりし頃ロンドン王立學士院(The Royal Society of London)は主な聯合諸國の學士院へ科學的萬國協會を組織することにつき協議せんがためにその代表者を招待致しましたので、我が學士院は代表者として櫻井錠二及び田中箱愛橋の兩教授を派遣致しました。此の會議は同年の十月九日から十一日までロンドンに於て王立學士院主宰の下に開催され、ベルギー・ブラジル・フランス・イギリス・イタリア・日本・セルビア及び米合衆國の代表者が參會し、中歐諸國の科學者との將來の關係の問題に就て參會諸國の態度を定むべき宣言を眞先に全會一致で議決しました。

此等の決議中で研究會議の成立に直接關係せるものは、これ等の諸國は從來の萬國科學團體から脱退して新たに團體を組織すべきこと、その各國に於て學士院が發議者として其の國內に於ける研究の促進及び聯絡を圖るため國內學術研究會議(National Research Council)を創立すべきこと、これ等の國內學術研究會議は科學の諸分科及びその應用に就ての國際的の聯絡及び統一の中央機關として萬國學術研究會議(International Research Council)を創立すべきことであります。萬國學術研究會議の創設に就ては歐米間に大いに議論があつたやうでありますが、我が櫻井教授は其間に立つて協議をまとめることに大いに盡力されたと聞及んでをります。

ロンドン會議を豫定の期日以上に繼續することは事情が許さないで、同年十一月二十六日から二十九日までパリで科學學士院(L'Académie des Sciences)主宰の下で開催され、これにはポーランド・ポルトガル及びルーマニアからの代表者も出席致しました。我が國からは矢張櫻井及び田中箱の兩教授が出席されました。科學研究に就ての國際的聯絡は四ヶ年以上も戦争に由て斷絶されたので、萬國學術研究會議の組織を延期することは最早不得策であるから、代表者を出せる各國に於て國內學術研究會議が設立されるまで科學の諸分科に於て諸種の萬國協會を設立すべき目的で、パリ會議は假りに萬國學術研究會議の任務を執行し、直ちに必要に迫られた科學の分科に於て萬國協會の組織に着手すべきことを決議しました。ベルギー・フランス・イギリス・イタリア及び米合衆國を代表する五名を實行委員として會議に提出された諸種の問題、特に新萬國團體の創

立に關する事項を處理せました。先づ萬國天文學協會及び萬國測地學及び地球物理學協會の假定款を採擇し、また萬國化學協會の計畫を立て、提出しました。

翌1919年(大正八年)七月十八日から二十八日までブリュッセルに於て開催の萬國學術研究會議に於て萬國研究會議並にその保護の下で成立した萬國天文學協會・萬國測地學及び地球物理學協會及び萬國純正及應用化學協會が正式にその成立を認められ、そして數學・物理學・地質學及び生物學のやうな或他の萬國協會に對してもまた假定款を採擇し、これ等の諸協會の實際の聯絡その他に就て論議されました。この會議には田中箱教授が帝國學士院の代表者として參會されました。

ロンドン及びパリ會議に派遣した代表者の報告に由り、帝國學士院は我が國に於ける學術研究會議を設立することの極めて重要なことを認めまして、本邦學術研究會議の創設に關するすべての問題を調査すべき委員を設け、其の研究の結果として本邦學術研究會議は政府の保護の下にあると同時に科學及び其の應用の研究に従事する者を代表する自治的團體たるべきものなることの結論に達し、大正八年(1919)六月の學士院總會は委員會の報告を採擇し、院長男爵穂積陳重は學術研究會議の設立に關する建議書を政府に提出致されました。政府當局に於ても其の必要を認められ、第四十三回臨時帝國議會の協賛を経て大正九年(1920)八月學術研究會議の官制が公布されました。其の前の第四十二回帝國議會解散のため此の官制の制定が大いに遅れましたのでありますから、帝國學士院は學術研究會議の成立に至るまでそれに代つて萬國學術研究會議に加入致しまして海外の學界と聯絡を保つと同時に學術研究會議設立の準備として其の會員の推薦につき審議を盡しまして、官制の制定公布後間もなく會員九十四名の任命を見たのであります。そこで大正九年の十二月十日帝國學士院長男爵穂積陳重は學術研究會議第一回總會を招集して會長及び副會長の選舉を施行し、會長に男爵古市公威また副會長に櫻井錠二教授が當選され文部大臣の認可を受け直ちに穂積院長から古市會長に事務の引継ぎが行はれ爰に學術研究會議は其の設立を完成したのであります。

學術研究會議の官制及び會則に據りまして其の要旨を申しますと、學術研究會議は文部大臣の管理に

属し科学及び其の應用に關して内外に於ける研究の聯絡及び統一を圖り其の研究を促進獎勵するを以て目的とするのでありまして、其の會員は學識經驗ある者の中から學術研究會議の推薦に基き文部大臣の奏請に依り内閣に於て任命するものであります。會員の定員は百名以内となつてをります。

其の總會に於て學術研究會議の學術部は天文學・地球物理學・化學・物理學・地質學及び地理學・生物學及び農學・醫學・及び工學の八部からなり、各部に於て部長及び副部長を選挙しました。

上記八學術部の他に尙總務部があつて、これは會長・副會長・各學術部長及び副部長から成つてをり、學術研究會議は萬國學術研究會議に於て總務部が代表し、また萬國純正及び應用化學協會に於て化學部が代表するのであります。化學に關係のない部のことは省略致します。唯其の後數學部が増設されました。各學術部に於ては學術研究報告の歐文雜誌を發行致してをりますが、唯化學部のみは或事情によつて其の發行が中止の状態になつてをります。

學術研究會議は毎年四月定期總會を開き、部會は必要に應じて隨時開くことになつてをります。會員の任期は六ケ年で、三年毎に半数改選を行ひ、會長・副會長・各學術部長及び副部長の任期は三ケ年でありますが何れも重任を妨げないのであります。現在の會長は櫻井錠二教授で副會長は田中館愛橘教授であります。

次に萬國化學協會及び萬國純正及應用化學會議の成立ち及び經過に就て雜つとお話することに致します。

英國には化學會・工業化學會・化學製造業者協會・分析士協會・生物化學會・醸造學會など數多の學會や協會がありますが、化學に關係ある諸團體が聯合して一つの機關を設けることの必要が痛感せられるやうになつたので、ケンブリッジ大學の教授サー・キリヤム・ボープが1918年の化學會の年會に於てこれに論及されてから其の實行に着手し、1919年に純正及應用化學聯合評議會 (The Federal Council for Pure and Applied Chemistry) が成立致しましてボープ教授が會長に、またロンドン大學の名譽教授アームストロングが幹事に推舉され、此の評議會は大學官衙などへ種々進言し、また他の依頼によつて調査を行ふなど英國の化學のために大いに盡す所があつたのであります。

フランスに於ても化學關係の諸種の學會が集つて同様な聯合評議會が組織され、フランス大學(College de France)のムーロー教授が其の會長に推され、イタリーに於ても同様な聯合評議會が組織されてボロニア大學のシャミシアン教授が其の會長に推されたのであります。

1918年(大正七年)十一月英國工業化學會のロンドン部會へ佛國工業化學會長ケストネルを講演に聘したとき、英佛兩國の化學者の間に聯合會を組織することが話題に上り、爾來佛・英・米・伊・及び白の化學者間に商議があつて、1919年の四月パリに於て上記のフランスの化學に關係の諸會の聯合會が設立せられたとき、英・米・伊・白等の化學者を招待して聯合國側の諸國の聯合化學會議を設立する豫備會議を開催し、ムーロー教授を座長とし、佛國工業化學會幹事のゼラールを幹事とし、全會一致で聯合諸國の化學者の聯合評議會を設くべきことを決議し、各國の代表者は六名宛と定めた。この聯合評議會の目的は平和克復後も戰時中と同様に、聯合諸國の化學者の親睦を圖り聯合諸國の化學會の協同助力を期し化學全般の進歩を圖らんとするのでありまして、その第一回會議は英國工業化學會の招待によつて同年七月ロンドンに於て催さるゝ同會の年會と同時に開催することとし、佛のムーロー及びケストネル、英のボープ及びブルイス、米のコツトレル及びザネツチ、伊のパテルノ及びデルフイニ、白のシャヴァンヌ及びクリスマーを其の準備委員に舉げ、ゼラールに幹事を依託し、聯合諸國が各其の國に於て純正及應用化學の國內聯合評議會を組織して之れに参加せんことを希望し、將來は中立國の同様な評議會も之れに加はらんことを希望し、また萬國會議の會則なども立案したのであります。

1919年七月十五日から十八日までロンドンに於て英國工業化學會の第三十八年會が開催され、それと同時に英・米・佛・伊及び白の諸國の代表者の列國會議が開催され、その會に於て英のボープ教授は聯合國間に於て列國化學會議を組織することの必要を論じ、現に萬國學術研究會議に英國の純正及應用化學聯合會はそれに加入すべき英國の化學委員會たる資格十分なるが故に他の諸國の國內聯合會も同様たるべきことを論じ、また歐洲中部諸國を萬國會議に加入せしむべきや否やに就て論じ、これは學術研究會議に於て深く審議すべき問題なりとし、また化學に

關係ある諸種の問題に就て論じ、之れに對してワツシュバーン・アームストロング等の間に討議がありました。萬國化學會議の組織に就て數回の評議があつて英・佛・伊の化學聯合評議會・米國學術研究會議の化學部會及び白國の化學會の聯合にて萬國純正及應用化學協會 (International Union of Pure and Applied Chemistry) を設けることになりました。これに加入せる各國は其の人口に應じて經費を分擔し、またこれに應じて評議員の數を定めました。最低は人口五百萬以下で分擔金年額 500 フラン、評議員一名、最高は人口三千萬以上で分擔金年額 4500 フラン、評議員六名でありました。その後分擔金のことにつき變更する所もありましたが別にお話は致しません。

評議員の互選によつて會長一名、副會長四名及び幹事一名を定め、これを理事員とし、其の他専門委員の設置、會議の規定等會として必要な事項を議定し、本協會を萬國學術研究會議中の化學部となるものとし、萬國學術研究會議に於て化學代表の委員は本協會に委員を出す所の各國會議に於て之れを定め、本協會の役員は直ちに萬國學術研究會議の化學部の役員となるべきことを議決し、之れに就ては當時恰もブリュッセルに於て開會中の萬國學術研究會議と交渉することになりました。米國に於て計畫せる物理學及び化學の恒數の批判的表 (Critical Tables) の刊行を認め、各國にも委員を置いて米國の委員を補助することとし、また 1910 年に其の事業を開始した化學・物理學及び工學恒數及び數値の年表の刊行事業の重要性を認めこれを繼續すべきこと、各國に於てこれを援助すべきことなどを議決し、その他化學に關する事業などに就ても協議しました。なほまた學術的の講演などもありまして、次回の會議は翌年六月ローマに於て開會することに致しました。

上記のブリュッセルに於ける萬國學術研究會議に英・佛・米・加・白・伊の化學者が參會して、萬國純正及應用化學協會を萬國研究會議の化學協會たることが確定され、1911 年 (明治四十四年) に創立の萬國化學協會を解散することを議決致しました。

この萬國化學協會といふものは 1911 年に創立され、第一回は四月パリに於て開催され、英・佛・獨の化學會の代表者が參會致しました。第二回は 1912 年の四月にベルリンに於て開催され、英・獨・佛・瑞・米・露・和等から代表者が參會しました。第三回は 1913

年 (大正二年) ブリュッセルに於て開催され、この時には十四ヶ國の化學會が加入し、我が東京化學會からの評議員として長井長義教授・櫻井銳二教授及び高松豊吉教授の名が評議員の表中に見えてゐますが、我が國からは一名も參會者はなかつたやうです。これ等の會議に於て種々化學上の問題が協議され、特別委員會なども設けられましたが、世界大戰のため中止され、そして上記の如く 1919 年に解散になったのでありますから、これに就てはこれだけに致して置きます。萬國化學協會へはベルギーのソルヴエーから巨額の金額を寄附致したのでありますが、解散に際して協會は其の資産をソルヴエーに返還することになりました。

上述のやうな順序を経て萬國純正及應用化學協會が成立致しまして、其の第一回總會は 1920 年 (大正九年) 六月會長佛のムーロー教授司會の下でローマに於て開催され、イギリス・フランス・米合衆國・イタリア及びベルギーの五ヶ國の代表者が參集し、カナダ・デンマーク・スペイン・ギリシア・オランダ・チエコスロバキヤ及びポーランドが本協會に加入することを承認し、そしてデンマーク・ギリシア・オランダ・ポーランド及びチエコスロバキヤの代表者は此の總會から出席致しました。

幹事ゼラールは萬國純正及應用化學協會の組織に關し前回の會議の議決を報告して其の承認を得ましたが、其の大意は次のやうであります。

萬國純正及應用化學協會に加入せんと欲する國は先づ其の國內に於ける化學關係の諸學會の代表者から成る評議會か或は聯合協會を組織せねばならない、そしてそれには化學會か學士院か研究會議か其の他同様な團體か或は政府かが發起主動者となるべきであるとなりました。事務上の種々の組織に就ても決議し、評議會・常任委員會・諮問委員會及び總會を同時に毎年一回開催して之れを Conference of the International Union of Pure and Applied Chemistry と稱することに致しました。我が國ではこれを萬國純正及應用化學會議と申したこともありましたが其の後萬國純正及應用化學協會總會と申すやうになりました。

此の總會に於てリンデ教授は佛國化學聯合會の名に於ての發議で萬國純正及應用化學協會に萬國會議 (International Congress) を附屬させることになり、四年目毎に協會の總會と同時に開催することになり

ました。此の會議は諸種の部に分かれて研究報告や論文の討議などをするのであります。また本總會に於て化學分析の統一、萬國化學規格中央局の設置、熱化學に關する委員會の設置、萬國原子量委員を設け從來の同委員たるクラーク・ソープ及びウルバンに繼續して委員たることを求めること、理化學恒數年表編輯に關する委員會を本協會の附屬とすること、物理化學的記號に關することなどが決議されました。

第二回萬國純正及應用化學協會總會は翌年の1921年ポーランドのワルソーで開會のことに豫定されてゐたのでありましたが同國の事情がこれを許さないで、その年の六月會長佛國のムーロー教授司會の下でブリュッセルに於て開くことになりました。此の總會に於てアルゼンチナ・日本・モナコ・ノルウェー・ポルトガル・ルーマニア・スキス・ウグエー及びユーゴスラビヤの本協會への加入を承認し、前會に於て設置した諸種の委員會の報告の承認、また新たに委員會の設置もありました。其の他なほ化學に關する種々計畫が協議されました。萬國原子量委員のことに就て一言せんに、その組織を改めて化學元素の萬國委員會とし十二名の委員を設け、其の一部は原子量を調査し、他の一部は同位元素の表をつくり、また残りの部分は放射能性元素に關する恒數を蒐集するものと致し、年々進歩の狀況を報告する任務を託しました。

第三回總會は1922年(大正十一年)六月リオンに於て會長のムーロー教授の司會の下で開催され、新たに入會を申込んだ濠洲・リニクサンプルグ及びベルーの人會を可決しました。我が國の代表者(井上仁吉教授及び近重眞澄教授)も今回から初めて参加致しました。また諸種委員會にも我が國から國際委員が参加することになりました。事業の一端を示すために委員の種類を列記致します。即ち化學元素委員・化學命名法に關する委員(1)無機化學・(2)有機化學・(3)生物化學)・萬國化學規格局委員(1)化學規格局・(2)研究用純粹藥品・(3)工業的製品に關する標報)・熱化學基準確定委員・恒數國際委員・燃料及び窯業製品研究所の國際委員(1)固體燃料・(2)液體及びガス態燃料・(3)窯業製品)・理學及び工業的所有權に關する國際委員・文獻國際委員及び榮養品保存法に關する國際委員であります。この總會へは我が學術研究會議の化學部會から代表者を

席させることになつてをります。

第四回總會は1923年(大正十二年)六月ボーブ教授司會の下でケンブリッジに於て開會、我が國からは朝比奈泰彦教授が参加されました。第五回總會は1924年會長ボーブ教授司會の下でコペンハーゲンに於て開會、眞島利行教授参加、第六回總會は1925年ボーブ教授司會の下でルマニアのブカレストで開會、片山正夫教授参加、第七回總會は1926年ワシントンに於て會長 オランダのコーヘン教授司會の下で開會、松原行一教授及び池田菊苗教授参加、第八回總會は1927年(昭和二年)ワルソーに於て會長コーヘン教授司會の下で開會、西川虎吉教授参加、此の總會に於て本協會の定款の改正案が提出され種々討議の末決定は次の總會に於て投票で決することになりました。以上の毎年の總會に於ける諸種の委員會に關する事項など凡て省略致します。

第九回總會は1928年(昭和三年)七月オランダのハーグに於て會長コーヘン教授司會の下で開催、私が櫻井錠二教授及び柴田桂太教授と共に参加致しました。十九ヶ國の正式代表員の他に總會準備委員會は協會理事會の同意を得て未だ協會に加入してゐないドイツ・ハンガリー・オーストリア及びロシアから數名の化學者を招待致しまして、ハンガリー以外の國からは數名の出席者がありました。

評議會はドイツ化學者の協力なしには本協會は國際問題を十分に討議すること不可能なりとの見地から、今度招待したる諸國は本協會に加入するに適當な團體を組織せられたいとの希望を決議しました。ボーブ教授は本協會事業の改造を論じ、委員會の多くは其の結果の無用のものなりしことを述べ、また價值あり且つ實行も困難ならざる少數の委員會例へば原子量委員會の如き殆ど中絶の有様なるを難じ、その發議によつて諸種の委員會の繼續・中止或は變更を行ふこととなりました。また多年の懸案たりし協會の定款及び會則の改正案は此回の會議で略その決定を見ましたが、その改正案には我が國の提案で採用されたものがありませんでした。本總會は從來毎年開催して來ましたが今後は隔年に開くことになりました。

第十回總會は1930年(昭和五年)九月白國のリエージュに於て會長コーペンハーゲン大學教授ビールマンの司會の下で開催、柴田雄次教授及び波多野貞夫海軍中將が参加されました。此の總會に於て本協會

の名稱から“純正及應用”の文字を削除することになりました。

第十一回總會は1934年(昭和九年)四月會長ビールマン教授司會の下でマドリッドに於て開催、松原行一教授參加されました。第十一回總會は1932年に開催されるべき予定でありましたが、世界各國の經濟事情に鑑み協會理事會の議を経て其の開催を1933年に延期し、其の後更に1934年に延期されたものであります。

世界大戰以前に萬國應用化學會議 (International Congress of Applied Chemistry) といふものがありまして第七回萬國應用化學會議は1909年ロンドンに於て開催、第八回のそれは1912年ワシントンに於て開催されましたが世界大戰のため中絶致しました。前に述べましたやうに化學協會の總會と共に化學會議を開催することは創立當時からも細則中にその條項がありましたが久しくその開催を見なかつたのであります。それが愈今回開催されることになったのであります。そして今後名稱を萬國純正及應用化學會議とすることになりました。諸種委員會の事業などのことに就ては省略致します。本總會に於て協會から入會脱退などの問題もありましたが、その結果現在の加入國は次の二十九ヶ國であります。

ドイツ	アルゼンチン	オーストリア
ベルギー	ブルガリヤ	ブラジル
カナダ	デンマーク	スペイン
エストニア	北米合衆國	フランス
イギリス	ギリシヤ	イタリア
日本	ラトヴィヤ	ノルウェー
オランダ	ベルー	ポーランド
ポルトガル	ルーマニヤ	スウェーデン
スキス	チエコスロバキヤ	
ソビエト聯邦	ウルグエー	ユーゴスラビヤ

萬國化學協會第十一回總會と共に開催されました
第九回萬國純正及應用化學會議は會長フェルナンデ

ス教授の司會の下で開會せられ、提出論文は次の八部に於て報告されました。I. 理論及物理化學, II. 無機化學, III. 有機化學, IV. 生物化學, V. 分析化學, VI. 農藝化學, VII. 教育及經濟問題, VIII. 燃料問題, そして I より V までは純正と應用との二小部に分たれました。各部に於ける研究報告の他に綜合講演及び特別講演もありました。

萬國化學協會第十二回總會は1936年(昭和十一年)スキスのルチエルンに於て會長バラヴァノ教授司會の下で開催、我が研究會議からは柴田雄次教授が參加されました。總會は隔年ではまだ頻繁なりとして四ヶ年に一回位でよろしからうの議論も出ましたが、それは1938年(昭和十四年)ローマで開催される第十三回總會まで決定を延期することになりました。今から二十七年許前に設立されまして當年まで佛のドクトル・マリーが幹事として主宰して参りました化學・物理學・生物學及び工學の恆數及び數値年表編纂事業は本總會に於て全然改造せられ、全くマリーの手を離れ、故キニリー夫人の女婿たるジョリオ教授を委員長とし新組織によつて其の事業を繼續することになりました。此の筆者はこの事業の創立當時から今日に至るまで我が國の國際委員として執務して來ましたが、その詳細の講述は茲では止めに致して置きます。

以上述べましたことは唯私の手元にある數種の報告書類を參考して概要をお話しただけのことであり、これ等のことは一般にはあまりよく知られてゐないやうでありますから、これは不完全なもので或は中には私の誤解してゐる點もあるかも知れませんが、これでも何かの御參考にでもなれば私の欣幸とする所であります。

昭和十二年二月廿日

於化學研究所輪講會